

---

## 平成 24 年 7 月九州北部豪雨災害調査報告

(立垣祐子、日本災害看護学会誌 14: 70-78, 2013)

2014 年 10 月 17 日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

平成 24 年 7 月 11 日から 14 日にかけて、梅雨前線の影響で特に九州北部地域において記録的な降雨量を観測した。福岡県、熊本県、大分県、佐賀県では深刻な被害を受けたとの報告がある。

### 1. 人的被害

死者 30 人、行方不明者 3 人、重傷者 7 人、軽傷者 21 人

今後心のケアを含め様々な支援がより一層必要になると考えられる。

### 2. 家屋被害:住家被害

福岡県 6, 428 棟、熊本県 3, 431 棟、大分県 2, 829 棟、佐賀県 103 棟

居住していた建物の生活が難しくなるため、セルフケアにおいても、生活体験の喪失という点でも深刻な被害といえる。

### 3. 家屋被害:非住家被害

福岡県、熊本県で 1000 棟を超える被害が生じている。

官公署、学校、病院等の生活ニーズやコミュニティーに密接に関わるため、今後の地域力に大きな影響を与えることが懸念される。

中でも熊本県では最大 1 時間/24 時間降水量が観測史上であったり、黒川が氾濫したりと広域で大水害となった。この被害状況の確認、災害体験、住民の健康ニーズと支援、看護実践と必要性、外部支援状況について被災地を訪問し調査した。

### 1. 災害体験

被災病院ではベッドマットレスやカルテの一部が浸水し、使えなくなった。このため、覚えていた患者の ID や 7 月分の支払い記録から情報を取り出した。被災後 2 週間は内線・院内 PHS が使えず、院内で携帯や公衆電話などの外線を使用していた。

### 2. 住民の健康ニーズと支援

避難所では、7 月末には被災者の疲労、外傷、高血圧、不眠、便秘が目立った。訪問看護ステーションや県事業の広域支援センターの地域リハビリが中心となり、避難所で生活不

活発病の体操などを行った。7月18日からは精神保健福祉センターによるこころのケアに関する支援が入った。避難所支援から全戸訪問に支援内容を切り替える時期(7/24)に終了している。

### 3. 看護実践と必要性

災害発生直後の早い時期からスタッフの健康管理のためにスタッフ用健診担当医を配置したが、しばらくほとんど利用されていなかった。被災後2-3日は人手不足であったが、その後は避難所からスタッフが出動するようになった。

### 4. 外部支援

7月14日から16日、県の保健師が中心に避難所を回った。

### 5. こころのケアを目的とした病院支援

調査を行った8月2日初旬は被災状況の個人差が出てくる時期であり、被災したスタッフのこころのケアと今後の取り組み方法についての情報提供を行った。

これらの調査結果から、被害状況の確認や被災地内外からの支援状況を確認できた。スタッフ用の健康担当医を配置していたものの実際には利用する余裕がなく、片付けの終わる約3週間後には心身の不調が出現していった。

水害は早いペースで復旧・復興がすすんでいく。一方こころの問題は長期的な視線による支援が必要であるため、今後も継続的な支援が必要となる。